O12-13

専門職助産師として行う女性のライフステージに応じた健康教育

北見赤十字病院　周産期母子センター

○高見（たかみ）　淳子（じゅんこ）、早坂　文枝

当院の助産師は、女性のライフサポーターとしてライフステージに応じた健康教育が出来るように取り組んでいる。その取り組みについて報告する。
【学童期】小学校高学年を対象に、夏休み期間中に親子で参加出来る「いのちの大切さ」を学ぶ2時間のワークを行っている。切迫入院している妊婦さんに協力を得て、実際にお腹にふれて胎動を感じ、心音を聞いて小さな命が宿っていることを知ってもらっている。また、自分はどうやって誕生したのか助産師の寸劇を見てもらい、最後に親へ自由に手紙を書いてもらっている。「産んでくれてありがとう」と感謝の気持ちを書く子ども達が多くいる。参加した親からも性について話し合うきっかけが得られたと好評である。
【思春期】市の保健師と協働して、市内の中学校・高校へ思春期講話を年間10件程度行っている。「いのちの大切さ」をテーマに行っているが、助産師ならではの出産エピソードを話すため生徒には関心が高く、「自分も相手も大切にしなければいけない」と感じる学生が多くいる。また、最近は近隣の市町村の学校から講話依頼があり、年々増加傾向にある。
【成熟期】高校を卒業したばかりの女性に、これから「大人の女性になる貴女へ」と題して講話を行っている。一人の女性として、自分の身体に関心を持ちセルフケアが出来る事を目指している。具体的な子宮癌健診の受け方、避妊の仕方、性暴力被害に遭った場合の対処法など学校教育の枠組みの制約がないため実践的な講話になっている。
【更年期】今年度、体調の変化を感じやすい時期の女性を対象にリプロダクティブヘルスに必要な人生後半の過ごし方について講話予定である。
このように人生各期の女性のニーズに応じて助産師として伝えておきたいことを講話に組み込み、専門職助産師として独自性の高い活動を行っている。

O12-14

赤十字病院における専門看護師の活動4 ー母性看護専門看護師の活動の実際ー

高松赤十字病院　看護部[1)]、日本赤十字専門看護師会[2)]

○増田（ますだ）　秋穂（あきほ）[1,2)]

当院は昨年度より地域周産期母子医療センターに認定され、分娩件数は伸び悩む中でも、他院からの母体搬送の件数は年々増加している。母体搬送に限らず、ハイリスクな要因を抱える妊産褥婦は年々増加し、何らかの合併症を抱えたケースや多胎等で妊娠中から長期の関わりが必要となるケースが目立つ。そのような状況下、当院では1名の母性看護専門看護師が活動し、主にハイリスクな患者のケアおよびスタッフのサポートにあたっている。専門看護師は主に関わり困難なケースに対し、直接ケアを行うだけでなく他部門との調整やスタッフからのコンサルテーションを受けている。また、研究や教育といった役割も担う。近年は身体的なハイリスクだけでなく、精神疾患を合併していたり、家族背景が複雑であったりと精神的社会的ハイリスクの増加が目立ち、倫理的問題をはらんでいる場合も多い。経過が早く、それに伴う変化も大きい母性領域においては、そのような対象に対し、より個別的でよりタイムリーな関わりが求められている。現在、母性看護専門看護師のポジションは病棟（外来と一元化している）の一スタッフである。専門看護師としての特別な活動時間は設定していない。しかし、比較的フリーに動きやすい担当（外来での妊婦健診担当や分娩室等）に従事することが多く、またその日の動きによって調整が可能である。これまでの活動を通し、他のスタッフの身近で活動してきたことで、スタッフの力を見ながら、困難ケースであっても、依頼できる部分は依頼するもしくは協力して実施することで、スタッフの成長が見られている。今後の課題は、一スタッフとして活動する中でも、常に専門看護師としての視点を持ち、それを発信し続け、必要な変化を起こすことである。

O12-15

排泄ケアの質向上を目的としたオムツ統一への取り組み

武蔵野赤十字病院　脳外科

○真鍋（まなべ）　香織（かおり）、今井菜穂子、神谷　優奈、川尻　聡子、
川見　美和、小泉　美佳、比留間真子、西　三代子

排泄は人間にとっての基本的欲求の一つであり、また尊厳に関わるものでもある。疾病を抱えている患者の中には排泄機能を障害されている者もおり、特に寝たきりの状況においては、オムツ使用を余儀なくされている患者も多い。オムツ着用に不快感があったり、尿漏れのために睡眠を阻害されたりと苦痛も大きいと考える。排泄ケア向上の一貫として、まずオムツ使用者への改善に着目した。排泄状況やケアについて、看護スタッフにアンケート調査を行い、オムツ使用時のケアにおける問題点を調査した。対象病棟はオムツ使用患者が多い脳卒中センターと脳神経外科病棟とした。調査の結果、「オムツに対する看護スタッフの知識が不十分であること」、「患者家族が持ち込むオムツも多く、看護スタッフのオムツ使用の技術統一ができていないこと」、「現在使用しているオムツそのものの性能では対応しきれていないこと」の3つが大きく問題点として挙げられた。また、調査結果からは、業務の中でオムツ交換に割く時間も多く、看護スタッフの負担が大きいという現状も浮き彫りとなった。これらのことから、知識・方法・物の三点を改善する必要があることが明確となり、この3点を解消するための一つの手段として、より良いオムツの統一を図ることが必要であるという結論に至った。今回、オムツの統一を図る上で、企業理念が当院の看護理念や看護ケアと一致し、品質・使用方法・サポート体制などが充実した一社の製品を選定して試行した。排泄ケアの質向上を目的としたオムツ統一への取り組みを行った結果を、取り組み前の調査結果と比較し、報告する。

O12-16

オムツによる排泄ケアの再考

日本赤十字社和歌山医療センター　本館9階B病棟

○羽田野紀子（はたののりこ）、川口　直子、宝井　寛子、西浦　一江

目的
オムツの種類や当て方を習得し、漏れ、皮膚トラブルの軽減、オムツ交換による睡眠の妨げの緩和、経済的負担の軽減につなげ、オムツによる快適な排泄ケアを提供する。
方法
対象:A病棟入院患者10名、看護師37名
調査分析
I.A病棟看護師に講習前後にアンケートを実施
II.3日間尿量測定し、尿量に合った3種類の尿パッドを1種類／日、夜間6時間毎に交換。吸収力、モレ、通気性、逆戻り、皮膚トラブル、睡眠状態、価格、買い易さを評価し1種を選定
III.そのオムツを4日間使用し皮膚トラブル・モレを評価
結果
I.オムツの種類・機能を知っているは8％から講習後22％。オムツ交換を変更した方が良い32％。オムツの選択ができる31％
II.１日使用し通気性、逆戻り、皮膚トラブルの有無は差異なし。吸収力A＞B＞C漏れA＞B＞C価格C＞A＞B買い易さA＞B=C。結果A
III.Aは皮膚トラブルなし。漏れは寝衣まで2.5％、アウターまで13％。漏れの原因は31％が当て方。31％が便失禁。睡眠状態は日常生活自立度ランクCの患者は0時に20％、2時に80％が閉眼、日常生活自立度ランクB以上は0時、2時共に80％閉眼。Aが良い92％
考察・結論
オムツの機能や種類を知る事は困難だが、90％の看護師が改善の必要を感じ、当て方を学習し、適切な商品を選択する事が必要と感じている。漏れが少なく吸収力が良いAは交換も少なく、総合的に考えると経済的である。漏れには当て方や便が影響し、当て方が重要だと示唆している。睡眠に関しても、日常生活自立度ランクCの患者は昼夜のリズムが乱れ評価できないが、日中覚醒しているランクB以上は熟睡していると考える。以上のことから、オムツの機能や種類、当て方を学習して技術や知識を向上し、皮膚トラブル、モレ、吸収力、排泄物の性状、睡眠の妨げ、経済性などを考えることがオムツによる快適な排泄ケアにつながる。